

## 「菅平生き物通信」の発行（第13回筑波大学技術職員技術発表会報告集）

著者	金井 隆治, 正木 大祐, 佐藤 美幸
雑誌名	筑波大学技術報告
号	34
ページ	48-52
発行年	2014-03
その他のタイトル	Publication of "Sugadaira Ikimono Tsushin"
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00123920">http://hdl.handle.net/2241/00123920</a>

## 「菅平生き物通信」の発行

金井 隆治、正木 大祐、佐藤 美幸

筑波大学生命環境科学等技術室(菅平高原実験センター)

〒386-2204 長野県上田市菅平高原 1278-294

### 概要

菅平高原実験センターでは 2009 年度から「菅平生き物通信」を発行している。現在上田市(旧上田市および旧真田町)を中心とした約 35,000 世帯に配布されている「菅平生き物通信」について報告する。

キーワード：社会貢献、広報誌

### 1. はじめに

長野県上田市菅平高原に位置する菅平高原実験センター(以下：センター)は 1934 年に東京文理科大学附属菅平高原生物研究所として創設された。その後、東京教育大学理学部附属となり、1977 年筑波大学菅平高原実験センターを経て現在に至る。

地元の方には「文理科」、「教育大」、「筑波」と呼ばれ親しまれてきた。しかし、地元の方々と交流の中で、多くの方はセンター内に何があり、どのような人がいて、どのような活動が行われているかは知られていないことがわかった。

そのため、2009 年のセンター創設 75 周年記念事業の一環として、センターの広報誌を発行することとなった。

### 2. 編集について

#### 2.1 創刊号～第 6 号まで

2009 年 6 月のセンター連絡会で初めて広報誌の発行が検討され、若手数人でワーキンググループを作った。ワーキンググループで広報誌のタイトルが相談され、生物関係のセンターであることから「菅平生き物通信」(以下：「通信」)となった。内容はセンターの説明、個人の研究について、観察会のお知らせなど自然に関するものであれば良いことになり、記事はセンターの教職員が交代で執筆することになった。サイズは B4 表裏とし、文字の大きさ等は編集を行い適切なサイズに調整することとなった。そして 3 ヶ月に一度、菅平地区約 350 世帯を対象に、新聞折り込みとして発行することになった。

編集作業は技術職員室が担当し、Microsoft wordを使用して行った。全体をいくつかのブロックに分け、大まかな内容を決め、教職員に担当を依頼し記事を集めた。タイトルはじめ、文中のイラストなども描き文章量や読みやすさなど比較して、フォントサイズやイラストのサイズ等を決めた。



図 1. 生き物通信創刊号(表)







図 3. 生き物通信第 7 号(表)



図 4. 生き物通信第 7 号(裏)



図 5. 生き物通信第 10 号(表)



図 6. 生き物通信第 10 号(裏)

ため、予定が立てやすくなった。年間スケジュールが判明するため、記事の担当者をあらかじめ決めることができるようになった。先生方への記事の依頼を実習の予定などと相談しながら行えるようになった。また執筆した回数が目に見えるようになったため、記事の依頼をしやすくなった。

第 7 号からの打ち合わせを進める中で、東郷堂から要望の一つ挙げられた。それは夏休み前の「通信」に「自由研究特集をお願いしたい。」ということだった。東郷堂の考える自由研究特集とは、小中学生の夏休みの自由研究のネタやポイントをまとめた特集号のことだった。

第 9 号までは Microsoft word を用いて編集作業を行っていたが、サンビームの担当者と打ち合わせを進めるなかで、お互いの編集ソフトの違いから作業に無駄が生じていることが指摘された。今後の発行について検討した結果、編集ソフトの新規購入を決めた。サンビームに相談し、Adobe 社の Indesign を購入した。

第 10 号(図 5、図 6)からは Indesign を使用して編集作業を開始したが、当初は使用方法が十分に習得できず、編集作業に多くの時間が必要となった。また、この第 10 号は東郷堂から要望のあった「自由研究特集号」とした。第 10 号はセンターの多くの学生に協力していただき、普段の紙面構成とは大きく異なり、自由研究のネタやコツを記事にまとめた。留学生にも記事を書いていただき、英文のまま掲載したが、英文についての評価は良くなかった。

Indesign の使用法は、参考資料を見てもなかなか習得できなかったため、サンビームの担当者にセンターまで足を運んでいただき、使用方法等を教え

ていただいた。その甲斐もあり最低限の使い方を習得することができた。現在では、基本の形も定まり、編集作業にも多くの時間を割かれることはなくなった。Microsoft word では図や写真を挿入し、移動するたびに文章全体が移動し、そのバランスを修正することに非常に時間が必要となっていた。しかし、Indesign ではそのようなトラブルはなく、行間やフォントの調整、図などのサイズ変更などの作業もストレスなく行うことが出来た。また、題字には手書き風のフォントを生かしたまま背景を入れることもできるようになった。

### 3. 記事について

創刊号から第 8 号までの発行間隔は 3 ヶ月程度で時間的余裕もあったため、特に記事の担当者の予定を考えることはせずに、希望者を募り記事をお願いしていた。技官室で小さなコラムを担当し、その掲載・非掲載で記事の不足分を調整しながら編集を進めていた。しかし第 9 号からは発行予定が決まっていたため、前もって記事の担当者を決めることにした。休刊日の予定と東郷堂の要望と実習の年間スケジュールを参考に第 14 号までの担当者を決めた。以降、年末が近づき東郷堂から翌年の休刊日の予定が届くと発行予定が決まり、記事の担当者を決めるようになった。

記事の依頼は「字数」、「締切」、「関連する写真もしくは絵」、「掲載予定箇所」を伝えている。一度連絡を出すだけで上手く集まることはないため、二度三度と連絡を出すようにしている。また、センターを良く利用している先生方や、卒業研究等で滞在し

ている卒研究生にも依頼している。特にセンターに初めて長期滞在する方には研究内容や自己紹介、好きなことなどを書いていただくようにしている。

また、担当者の記事が間に合わないこともあるため、記事のストックを作るようにしている。今まで何度かこのストックを使用して、窮地を脱している。このストックはいろいろな方をお願いしているが、順調には集まらず、技術職員自らが執筆することもある。

#### 4. その他

2009 年度よりセンターは社会貢献活動にも力を入れている。その社会貢献活動の一環で知り合った中に「週刊上田新聞社」がある。「週刊上田新聞社」は上田地域のミニコミュニティ誌「週刊うえだ」を毎週土曜日に上田市とその周辺市町村およそ 72,000 世帯に配布している。自然観察会の取材などで何度か対応するうちに、『協力して何かできないか』という話になった。いろいろ検討した結果、「通信」ほど字数は必要ないが、菅平の自然の紹介のようなコラムを担当することとなり、掲載場所も「週刊うえだ」の 1 面の上部に決まった。

2011 年 7 月から始まったコラム「菅平高原のはる・なつ・あき・ふゆ」の 1 年目(2011 年 7 月～2012 年 6 月)は教職員が記事を書いた。当初は 1 年で終了予定だったが、週刊上田新聞社からの強い要望があり 2 年目(2012 年 7 月～2013 年 6 月)も継続をすることになった。しかし、教職員だけの対応では負担が大きいため、学生にも原稿を依頼できることとなった。現在 3 年目(2013 年 7 月～2014 年 6 月)を迎えているが、3 年目の原稿は、センターで開催した公開講座の受講生であるナチュラリストの原稿が多い(図 7)。これはナチュラリストの原稿でもセンターの教職員の校正があれば掲載可能であると合意したため、予定では 2014 年 6 月で連載終了となる。

#### 5. まとめ

東郷堂の協力により大きく発展してきた「通信」は 2013 年 12 月に第 30 号(図 8、図 9)を発行した。2014 年も 8 回の発行が予定されている。

熱心な読者からは「新号はどこで手に入るのか?」とか「いつもの場所にないけれどどうしたのか?」という問い合わせがある。知人には「楽しみにしている」という話を聞くが、センターまで反響が届くことは少ない。週刊上田新聞社によると、「読者から反響が届くようになるまでには時間が必要」とアドバイスをいただいている。地域に定着し、反響が届くように「通信」の発行を継続していきたい。

本年度、センターは教育関係全国共同使用拠点に認定された。来年度からは本年度以上に業務が増加することが考えられる。限られた時間と人員の中で、「通信」発行を継続していくことは困難である。しかし、大学での成果を一般の方に伝えていくこともセンターの技術職員の業務の一つであるため、編集方法や発行回数等を検討して、「通信」の発行を維持していきたい。また、記事集めを進めながらも、楽しい紙面、多くの読者に目を止めてもらえる「通信」を心掛けていきたい。



図 7. 週刊うえだのコラム



図 8. 生き物通信最新号(表)



図 9. 生き物通信最新号(裏)

#### 謝辞

「菅平生き物通信」の発行にあたり、有限会社東郷堂、株式会社サンビームの皆様には様々な便宜を図っていただきました。「週刊うえだ」のコラム掲載にあたり、週刊上田新聞社の皆様には様々な便宜を図っていただきました。「菅平生き物通信」および「週刊うえだ」のコラムの記事について、菅平高原実験センターの教職員、常駐学生、センターを利用して研究をされている大勢の方々、ナチュラリストの皆様には記事の執筆にご協力いただきました。深く感謝いたします。

## Publication of “Sugadaira Ikimono Tsushin”

Ryuji Kanai,Daisuke Masaki,Miyuki Sato

Sugadaira Montane Research Center,University of Tsukuba,  
1278-294 Sugadaira-Kogen,Ueda,Nagano,386-2204 Japan

**Keywords:** Social Contribution, Newsletter